『輝ク』における日中女性の連帯とその変節
―インターナショナル ·フェミニズムから帝国のフェミニズムへ―

Sino-Japanese Women's Solidarity and its Apostasy in *Kagayaku*: An Analysis of the Transformation from International Feminism to Imperial Feminism

楊　佳嘉

Abstract

Founded during the Fifteen Years' War, *Kagayaku* (1933-1941) aimed to promote "solidarity with all women" and serve as a platform for Japanese intellectual women in the literary and critical fields. This magazine contains several pieces about China, particularly the issue of solidarity between Chinese and Japanese women, which is discussed by these women cultural figures. Their narratives, divided into the earlier and later periods, show the following characteristics. In the earlier period, they were closely associated with leftist Chinese women cultural figures, and it can be pointed out that there was a growing sense of solidarity toward women's liberation. There is sometimes a look of envy, and at other times self-reflection and reaffirmation of themself as an opportunity to reassess the Japanese situation. In the latter period, blood, based on the geographical framework of the Orient, and motherhood, based on the gender framework of women, are positioned as important links in the goodwill and alliance between Japanese and Chinese women, through which peace between the two countries is expected to be achieved in their narratives. At the same time, "same blood" and motherhood became the new form of hope for Japanese and Chinese women's "solidarity". In the name of the " East Asia Construction", international feminism in the earlier period of *Kagayaku* slipped into the middle zone between internationalism and nationalism, and by being limited to "solidarity" of blood and motherhood, it embraced an affinity with the logic of aggression and was transformed into imperial feminism. Consciously or unconsciously, these intellectual women have fallen into the trap of " East Asia Construction" while advocating goodwill, alliances, and so on, and their good intentions have been distorted.

Keywords

『輝ク』、女性連帯、インターナショナル ·フェミニズム、帝国のフェミニズム、日中戦争

Kagayaku, Women's solidarity, International Feminism, Imperial Feminism , Second Sino-Japanese war

はじめに

『輝ク』(1933.4-1941.11)は長谷川時雨[(1)]によって創刊されたリーフレット(月刊)である。このリーフレットは「全女性が手をつないで進んでゆく為に」[(2)]生まれたものであり、その

(1)　長谷川時雨(1879-1941):戯作家、小説家。明治時代から昭和初期にかけて文壇で活躍し、代表作は戯曲『海潮音』(1905)、『日本美人伝』(聚精堂、1911)、『旧聞日本橋』(岡倉書房、1935)などである。昭和初期において、雑誌『女人芸術』と『輝ク』の発行を通して、女性の社会進出、地位の向上に力を入れた。

(2)　「輝く会の発生」、『輝ク』、1933.5、p.8。その出発点は『女人芸術』の創刊と同じである。

前身である『女人芸術』[3]（1928.7-1932.6）の方針を継承している。モノクロ、4ページの狭い誌面であるが、文芸評論、消息作品、紀行、海外および国内各地からの通信などが多く載せられ、創刊当初の会員は、『女人芸術』時代の投稿者たちが多数を占めていたので、文芸、評論界の大多数の女性をつなぐ紐帯であったといえる。こうした女性知識人、文化人たちが集まる場としての『輝ク』は、個々の作家の動向を知ることに資料的価値がある[4]のみならず、1930年代の女性インテリ層の人たちの思想的動向とその変化がうかがえる資料としても注目に値するだろう。

先行研究においては、『輝ク』の全体像と性格、個別作家と『輝ク』の関係、越境した執筆者たちの投稿などの側面から論じられてきた。例えば、尾形明子は、1937年7月の日中全面戦争の開始を境に、インターナショナルな雰囲気が漂う前期と銃後運動の拠点となる後期に区分し、雑誌の性格と全体像を明らかにした[5]。個別作家と『輝ク』の関係については、『耀ク』を拠点とする時雨の銃後の原点[6]、田村俊子と『輝ク』の関係[7]、戦時下の『輝ク』における円地文子の執筆活動をめぐる分析[8]などがなされている。越境した執筆者たちの投稿については、サラ・フレデリックの議論と李煒の議論があげられる。フレデリックは戦時下という文脈における芸術と政治、ジェンダー、階級との緊張関係に注意しつつ、アメリカ、ブラジル、フィリピンなどの海外に在住する女性たちの寄稿を分析することで、ナショナリズムと軍国主義が高揚している時期にもかかわらず、『輝ク』における一部の女性たちの国際的な経験についての語りには、コスモポリタンで折衷的な視点が反映されており、それは当時のイデオロギーに完全に回収されているとは言い難いものであったことを指摘している[9]。李煒は尾形の研究を踏まえ、『輝ク』における中国関連の記事を整理したうえで、その内容を「中国女性への関心」、「「満洲」についての記録」、「中国戦地での取材／「慰問」についての記録」に分類し、それらの記事の時代を追った変化の特徴を、「ジェンダーの言説」（前期）から「政治の言説」（後期）へ、というようにまとめている[10]。しかし、このような評価

(3)　『女人芸術』（1928.7-1932.6）: 長谷川時雨によって創刊された文芸雑誌である。創刊当初は新人女性作家の発掘という役割を果たしていたが、やがて左傾化し、極左の雑誌と認定され、三回の発禁処分を受けた。資金不足、時雨の病気などの関係で、1932年6月を以て廃刊したが、多くの女性作家を文壇に送り出した点では、『女人芸術』という媒体の貢献度は高い。また、女性作家のみならず、多くの女性評論家、女性知識人もこの場で発信し、多層な読者に返信した。同時代のほかの女性雑誌と比べ、『女人芸術』は「全女性」を網羅し、様々な階級と地域を超え、女性たちを広くつなぐ回路を形成していたといっても過言ではない。

(4)　渡邊澄子「戦争下の円地文子 ――『輝ク』時代を中心に」、『芸術至上主義文芸』第35号、2009.11、p.92。

(5)　尾形明子『「輝ク」の時代 ―― 長谷川時雨とその周辺』、ドメス出版、1993。

(6)　尾形明子「『輝ク』の銃後運動 ―― 主宰者長谷川時雨を中心に」、『女たちの戦争責任』（岡野幸江ほか編）、東京堂出版、2004、pp.177-193。

(7)　尾形明子「田村俊子と『輝ク』」、『俊子新論：今という時代の田村俊子』（渡邊澄子編集、［国文学解釈と鑑賞］別冊）、至文堂、2005.7、pp.78-86。

(8)　同注（4）、渡邊前掲論文。

(9)　Sarah Frederick, Beyond *Nyonin Geijutsu*, beyond Japan: writings by women travellers in *Kagayaku* (1933-1941), Japan Forum 25:3, 2013.7, pp.395-413.

(10)　李煒『她們的叙事 ―― 近現代日本女性作家的戦争書写研究』、上海交通大学出版社、2023、p.118。

には問題もある。十五年戦争中に発行されていた『輝ク』が、厳しい検閲と弾圧の下で政治と離れたものであることは難しかったのは言うまでもない。しかし、その後期の特徴を「政治の言説」と一括りにしてしまえば、『輝ク』においてもっとも重要視されているジェンダーの問題が矮小化されてしまうのである。

後述するが、『女人芸術』と『輝ク』という長谷川時雨が主宰した二誌は、終始、女性文化の向上を目指し女性文化人に発信する場を提供するというフェミニズムの姿勢を貫いていた。換言すれば、前期と後期を通じて、『輝ク』の中国関連の記事において「ジェンダー」問題への関心は存在し続けていたのである。本稿で注目したいのは、時局の変化によって、そのジェンダーの言説がどのように政治と交渉しながら変化していくかという問題である。具体的には、『輝ク』における海外関連の記事の性格を明確にし、変化しつつある日中関係の時局の下における、日中女性の連帯とその変節をめぐる問題を中心に論じていく。この研究を通して、1930年代を生きる日本の女性文化人たちがインターナショナル ·フェミニズムから帝国のフェミニズムへと変質していった過程と、その思想の軌跡を究明したい。

一、『輝ク』と外部——『女人芸術』からの継承とその変節

全女性の連帯を夢として出発した『輝ク』は、その前身である『女人芸術』と同じく、海外へ強い関心[11]を示している。その特徴は、次の三点にまとめられる。

第一の点は、世界各地へ渡った日本女性からの通信と寄稿が豊富に載せられていることである。海外在住者からの寄稿の例としては、創刊当初は北米に在住していた田村俊子のカナダとアメリカからの書簡の掲載があり、閉塞感の中にいた会員たちからの反響が大きかったという[12]。アメリカで仕事をしていた坂西しほは、ワシントン議会図書館日本部における日本書籍、日本学研究、日本文学の出版状況などを紹介していた[13]。また、外務省の役人の妻である大石千代子は夫と共に世界中を移動し、『輝ク』が発行されていた間に滞在していたブラジル、フィリピン、「満洲」での経験を通信やエッセイの形で絶え間なく寄稿している。そのほか、1938年7月以降、国内での運動に挫折し、逃げ場としての「満洲」で新たな生活を開始したアナーキスト(望月百合子、八木秋子)やマルキスト(永島暢子)たち、作家として「満洲」で活躍していた横田文子らの通信やエッセイも少なくない。旅行者として海外から通信を送って来た者には、岡田八千代(フランス 1934.2)や望月百合子(中国　1936.4、6)、長谷川春子(中国　1938.1)、森三千代(中国　1939.1)、野上弥生子(イギリス　1939.2)などがいる。さらに、仕事の関係で訪問した海外から報告や通信を寄稿してくるのは、ソビエトを視察した除村ヤエ(1936.2)や文部省によって中国へ派遣された田村房の他には、従軍した記者や慰問団に参加した女性たちが多かった。

(11) 『女人芸術』における海外への関心の問題について、飯田祐子「「女人芸術」と外部」、『女性と闘争 —— 雑誌「女人芸術」と一九三〇年前後の文化生産』(飯田祐子、中谷いずみ、笹尾佳代編、青弓社、2019、pp.164-167)を参照されたい。

(12) 同注(7)、尾形前掲論文「田村俊子と『輝ク』」、p.80。

(13) 坂西しほ「ワシントン議会図書館日本部」、『輝ク』、1936.10、p.173。

第二の点は、『女人芸術』の時代のように、外国の事情を多く紹介することである。前期には、ソビエトの児童読物、「満洲」、朝鮮で活躍する女性の姿、台湾での見聞、中国人女性作家、女子留学生、中国北京での見聞、フランスのジャーナリスト、オーストラリアの小説、アメリカの日本関係の書籍、研究紹介、ブラジルの日系二世の問題など、様々な内容を紹介している。後期には、各国への関心がファシズム国家を中心とした戦時下の婦人の仕事、生活の紹介に偏っている。また、外国に関する記事の中で、中国と「満洲」についての記事が前期よりだいぶ増えており、そのほとんどは現地についての報告と講演である。

第三の点は、外国の職業婦人やインテリ女性を囲む座談会の開催、視察団との交流、外国人留学生を招く行事などを多く設けていることである。例えば、前期においては、ソビエトの職業婦人、童話作家などを囲む座談会についての記事が散見し(14)、中国の女優、女性作家からの寄稿(15)、アメリカの女性教育者からの通信など(16)も掲載されている。『女人芸術』と比べ、外国の女性知識人からの寄稿が載せられることが増えたのは前期『輝ク』の顕著な特徴であろう。後期になると、そうした寄稿はなくなったが、外国人留学生を招待する行事は続いており、留学生の少女たちからの寄稿が現れてきた。そのほか、中国の女性と親善するための評論や宣伝文などが多く掲載されており、親善という枠組みの中で銃後の活動の一環を果たしていたと言えるだろう。

以上のような特徴からは、時局の変化にもかかわらず、『輝ク』における外部への関心は薄くなっておらず、『女人芸術』の時代よりも積極的に海外の情報を取り入れていたことがわかる。女性自身の外地や外国での経験を語る文章が多く掲載されていることは『女人芸術』と同じであるが、海外の情報の取り扱いについては別の特徴が示されている。左傾化した『女人芸術』においては大量のソビエト関連の記事が誌面を占めていた(17)のに対して、『輝ク』ではソビエトに関する記事がだいぶ減っており、中国と「満洲国」に関する記事が急増している。また、多くの外国人女性や留学生との交流があったことも『輝ク』の特筆すべき特徴である。しかし、時局の変化によって、前期と後期でその性質が変化したことも否めない。尾形が指摘しているように、前期の『輝ク』はこの時代のどの雑誌よりもインターナショナルで、後期は銃後運動の中で国策に適うように図られていった(18)。

二、前期の『輝ク』と日中女性の連帯 —— 日中インテリ女性の交流をめぐって

前述したように、前期の『輝ク』の特徴の一つは、外国人女性からの寄稿が載せられ、外国人のインテリ女性との交流が重視されていたことである。この点については、特に中国

(14) 例えば、「クラフチエンコ女史に聴く：児童読物その他について」(1933.5)、「これからの童話についての抱負——メクシン氏座談会より——」(1933.6)などがあげられる。

(15) たとえば、王瑩「小さいお友達に：文化学院参観の後で」(1934.7)、謝冰瑩「輝クに寄す」(1935.1)などがあげられる。

(16) モーリン・ベンバートン(狩野弘子訳)「アメリカ通信」、『輝ク』、1936.11、p.177。

(17) 同注11、飯田前掲論、p.165。

(18) 尾形明子「『輝ク』解説」、『『輝ク』解説・総目次・索引』、不二出版、1982、p.6、15-16。

へ視線を向けたものとして、次の二つの事例が挙げられる。

2.1 来日した中国女性の発信とその応答 ── 王瑩と謝冰瑩の寄稿を中心に

1934年7号には、日本へ留学に来た中国の女優王瑩[19]の寄稿が載せられている。王瑩は文化学院に参観した後、小さな女子学生たちに対して前日歌った歌の意味を解釈したという。その中の一つの歌の曲名と意味は明言されていないが、「涎が垂れそう」な小虎が小さな山羊に「門をお開け」と声をかけるという歌の内容からすると、日中の時局を隠喩した歌であることがわかるだろう。また、彼女は中国の古い叙事歌の『花木蘭』の内容を引用し、女性主人公の木蘭のように、「一般の被圧迫女性達を導き」、「「自由」「平等」の輝ける路を歩んで」いくようと呼びかけている[20]。それに対する応答として次号に、会員の西村アヤと戸川エマの、王瑩の容姿や人柄に惹かれたことや、異国の友達になれたことの嬉しさを素直に表現した記事が掲載されている[21]。時局に無関心であったか、あるいはわざと時局の問題を避けたのかは、現在のところ明らかなことは言えないが[22]、王瑩が投げかけた二つの問題について、二人とも正面からの応答をしていない。

1935年１号には、中国の女性作家謝冰瑩[23]についての紹介文[24]があり、同ページに、謝冰瑩が『輝ク』読者への初対面の挨拶に代えて書いた文章、「「輝ク」に寄す」が掲載されている。この文章において、彼女は女性作家の使命は「文化運動の工作」と「被圧迫女性のための解放運動」であると指摘し、「無産婦人の生活」の「苦痛と要求」を創作の中に描き出すべきだと主張している[25]。謝冰瑩は1934年の秋に、二度目の留学で来日し、その後中国文学研究会の招待を受け、12月に開催された第一回の談話会で「吾が文学経歴」というテーマで講演を行った[26]。この文章は、この座談会に参加した若林つやの依頼によって書かれたもののはずである。

興味深いことに、王瑩と謝冰瑩は二人とも中国の左翼芸術運動と深く関わり、それぞれ

---

(19) 王瑩（1913-1974）：女優、脚本家、作家。1920年代末、左翼運動に熱中し、1930年に中国共産党に入党。その後、何度も検挙され、1934年に日本へ留学に来たが、翌年帰国している。李煒は、王瑩は来日した後秋田雨雀、村山知義らと日中の新劇運動について交流しており、秋田の紹介で長谷川時雨と知り合ったと推測している。（同注10、李前掲書、pp.119-120。）

(20) 王瑩「小さいお友達に：文化学院参観の後で 」、『輝ク』、1934.7、pp.66-67。

(21) 西村アヤ、戸川エマ 「美しいお友達に：王瑩さんにお会いして」、『輝ク』、1934.8、p.69。

(22) 筆者は西村アヤと戸川エマが残った資料を調べてきたが、この時期の時局に関する二人の発言や回想などの記録が見つからず、残念ながら現時点では断言できない。

(23) 謝冰瑩（1906-2000）：作家、1928年に「従軍日記」で文壇にデビューし、世の脚光を浴びた。1931年に初めて留学のために来日し、東京左連に参加している。「満洲事変」の後、反対運動に参加したため強制帰国させられた。『輝ク』に寄稿したのは、ちょうど彼女の二度目の日本留学期間中である。1936年に「満洲国」皇帝の来日を歓迎しない理由で逮捕され、釈放された後も特高に狙われ続けていた（共産党と深い関係のある容疑者であるため）が、日本人の友人の助けで帰国した。

(24) 若林つや「従軍日記の作者」、『輝ク』、1935.1、p.92。

(25) 謝冰瑩「「輝ク」に寄す」、『輝ク』、1935.1、p.92。

(26) 趙暉「謝氷瑩と中国文学研究会 ── 竹内好、武田泰淳との交誼を中心に ──」、『人文学報』第352号、東京都立大学人文学部、2004.3、p.30。

知名度の高い左翼女性芸術家と左翼女性作家として知られている人物である。『輝ク』の前身である『女人芸術』は極左の雑誌として認定され、発禁処分を受けた経験があった[27]にもかかわらず、前期の『輝ク』における中国女性からの寄稿は依然として左翼的な性格だったといえよう。周知のように、1933年2月の小林多喜二の虐殺をきっかけに、その後の日本の左翼文化運動は挫折し、低迷の時期に入った。その意味で前期の『輝ク』はラディカルであり、当時においては異色の存在であっただろう。

2.2 中国へ行った日本女性の発信　── 望月百合子と神近市子の訪中体験談を中心に

来日した中国人女性の寄稿が載せられる一方で、中国へ訪問した日本人インテリ女性の訪中体験を語る記事もある。たとえば、望月百合子は当時北京大学の教授であったジャック·ルクリュの病気見舞いのために、1936年2月に北京を訪問[28]し、約二ヶ月滞在した。そこでの見聞を『輝ク』に寄稿したのである。

彼女は、「春も秋もなく」寒い冬が終わったら、すぐ「暑い夏がやってくる」北京の気候や、住民が「ブルジョアと最下層民」に分けられ中産階級が「極く少ししかない」という階級的な特徴を見出し、中国に対する第一の印象を「両極端を持っている国柄」としている[29]。中国の女性について、望月は最下層の女性の苦しい生活に同情を示すだけでなく、とりわけ中産階級以上の女性に感心と羨望の眼差しを向けている。たとえば、インテリ層が集まる文学サロンで、彼女は中国人の女流文学者の真面目な態度を見て、「ヨーロッパでも余り見なかった程の立派さ」であると評価している[30]。ここからは、望月のヨーロッパを基準にして評価するまなざしが見られるものの、彼女が中国の女性文学者の真面さに感心していることは想像に難くない。また、生活面において、彼女は日本の女性より中国人女性の方が幸福であると認識している。

> 夫が幾人も妾を持つ習慣以外には、支那の女は日本の女より幸福だ。第一夫が妻を大切にする事はそのオリヂンがどこから来たかは知らないが驚く。(中略)モダン支那夫婦離婚訴訟は妻の勝で、(中略)日本人である私は驚きと共に羨ましさを感じた。/又支那の娘は男の子と同じ相続の権利を与えられている。(中略)現在はどの大学にも必ず女の学生が多数いる。/主席は例外なく男学生だが女学生は一般に普通程度の男学生より好成績を得ている。/支那の婦人の生活は日本の婦人の生活以上に不幸なもので

(27) 内務省警保局の『昭和六年中に於ける出版警察概観』(1931、p.212)によると、1931年10月号の『女人芸術』は「全般極左筆致」という理由で最左翼的な文芸誌として認定され、発禁された。そのほか、左傾化した後の3巻9号(1930.9)と3巻10号(1930.10)を含め、『女人芸術』は合計3回の発禁処分を受けている。

(28) 岡田孝子「望月百合子略年譜·著作目録」、『限りない自由を生きて ── 望月百合子集』、ドメス出版、1988、p.207。

(29) 望月百合子「北平第一信」、『輝ク』、1936.3、p.145。

(30) 同上。

はなく反って幸福な点が多いのではないかと思う。[31]

中国へ行く前には、望月は「支那の女の生活程呪われた哀れなものはない」[32]と思っていたが、実際に行って見ると、夫が妻を大切にすることや離婚訴訟における妻の勝訴に、彼女は驚くとともに羨望の眼差しを注いだという。また、彼女は日本ではまだ実現されていなかった女性の相続権や大学における男女共学という環境を中国で発見し、生活と高等教育における中国女性地位の高さを認めている。「支那の婦人の生活は日本の婦人の生活以上に不幸なものではなく反って幸福な点が多いのではないか」というように、女権の獲得、実際の生活における地位の高さという一部の中国女性の状況は、望月百合子にとって意外なことであった。

また、婦人運動家の立場から、神近市子は世界の女性と連帯する必要性を強調し、中国インテリ女性と交流した自分の経験を語った。彼女は、中国人女性がすでに参政権を獲得したことに、次のような感想を示した。

> 最近、私は中華民国の婦人達の集まりに招かれて、日本の婦人問題について語ったことがあった。若い人達が多かったが、この人々が自分達の国では我々が持たない参政権を持っているのだと考えていると、私は変な気持ちがして来た。そして私共は自分達のこの無自由を除去するために一体何程のことをしたかと考えた時、先輩顔して何の婦人問題ぞや？という無気力な反省に落ちて行くのをどうすることも出来なかった。/私共が自分達の正しい地位につくことは、文明国としての見栄えや体裁ばかりではない。それは世界の我々の同性に対する一つの友情であり、又義務でもある――これが、その時の私の反省から生まれた話であった。[33]

当時の日本より国力が低かった中国の女性が既に参政権を持っていたことに対し、神近市子は「先輩顔」をしている日本人女性として違和感を覚えたのではないか。望月百合子の中国女性への羨望の眼差しが、神近市子の語りには見られなかった。彼女は「無気力な反省」に落ち、日本人女性の婦人運動の行く方向性は世界の女性に対する友情と義務であると主張している。だが、神近市子の反省には一つの前提がある。それは、日本を「文明国」として、日本人女性を「先輩」として位置付けていることである。つまり、中国の婦人運動の現実は彼女が予想したことがひっくり返る形で現れており、それは中国の女性より上位の立場である「先輩」としての彼女にとって、意外なことであった。それゆえ、彼女は変な気持ちになったのだと考えられる。とはいえ、この時期の神近市子が、中国女性を含む世界女性と連帯するインターナショナリズムの姿勢を示しているのは明らかである。

(31) 望月百合子「北平第二信」、『輝ク』、1936.4、p.149。

(32) 同上。

(33) 神近市子「岸と底地」、『輝ク』、第4年12号、1936.12、p.181。

以上、来日した中国女性の寄稿と中国へ行った日本女性の体験談を語る記事を分析することで、前期の『輝ク』と中国の接点について、次の三点が明らかになった。まず、雑誌の性格として、左翼系の中国女性文化人との関わりが深く、女性の解放を目指す連帯感が高まっていることが指摘できる。それは、『女人芸術』時代の約束である「全女性進歩発達を願う」[34]方針に沿うものであり、とくに外国人女性と交流の場を作っているという点で、『女人芸術』の時期よりもさらに国際的であるといえる。また、会員たちの発言からすると、中国への好奇心が強く、中国の婦人運動や生活状況に感心する人も少なくない。そこには時に羨望の眼差しが注がれ、またそれを日本の状況を見直すきっかけとして自己反省と自己の再認識をしていくこともある。この点も、「満洲」事変以前の『女人芸術』の姿勢と一致している[35]。もう一つ注目すべきなのは、中国婦人運動の先鋭性や公と私の領域で日本女性より高い地位を獲得した一部の中国女性の現状は、彼女たちの想像の域を遥かに超えていたことである。「文明国」の女性文化人が「後進国」に当たり前のように抱いていた想像が転覆され、彼女たちはそれに驚かされることすらあったのである。

三、後期の『輝ク』と日中女性の親善と提携 —— 輝ク部隊親善部の仕事を中心に

日中全面戦争の開戦を契機に、『輝ク』は他の女性雑誌と同様に国策に適う方向へと変貌していった[36]。1937年8月に国民精神総動員実施要綱が決定されて間もなく、主宰者の長谷川時雨は、9月号の『輝ク』を「前線の兵隊慰問号とする」決定を示し、会員の協力を広く求めたという[37]。この号から、『輝ク』は銃後の女性文化人の拠点として変質し始め、その後は、現地に駐在する日本人女性や従軍女性などの寄稿文が増加していった。また、1939年1月に、従来の「輝ク会」は「輝ク部隊」へと再編成され、「知性婦人層の国策への参加」を目的とする知識層女性集合の組織となる[38]。国策に適応していったことは間違いないが、この時期の長谷川時雨は国が「女性の力を認め」、協力を求め始める時勢を鑑み、東亜建設という国策に乗り、女性知識人の個々の活躍を期待するために輝ク会から輝ク部隊へと再編したという個人の狙いもあった[39]。輝ク部隊の組織は、理事、評議員会、実行委員会などからなっており、実行委員会はさらに総務部、厚生部、親善部、研究部、出版部と分けられている。創立当初の親善部の仕事は日満支その他各国婦人との親善融和を図ることであり、1939年6月

(34) 長谷川時雨「一九三五年を迎えるにさいして」、『輝ク』、1934.12、p.85。

(35) 『女人芸術』における日本女性文化人たちの中国への眼差しについて、拙稿「『女人芸術』における中国表象 —— 越境する女性たちの記録を手掛かりにして」(『跨境：日本語文学研究』第8号、2019.6、pp.129-149)を参照されたい。

(36) 戦時下の女性雑誌の全体の発行環境について、三鬼浩子「戦時下の女性雑誌 —— 一九三七～四三年の出版状況と団体機関誌を中心に」(近代女性文化史研究会『戦争と女性雑誌 — 1931年～1945年—』、ドメス出版、2001、pp.14-43)を参照されたい。

(37) 長谷川時雨「兵隊さんに送りたい」『輝ク』、1937.9、p.217。

(38) 時雨「輝ク部隊のこと」、『輝ク』、1939.2、p.277。

(39) 長谷川時雨「女性知識人に求める活動 ——輝く部隊について ——」、『新女苑』3-3、1939.3、pp.222-225。

の会員募集要項には、「各国の婦人との親善芸術文化の交換」を行うことも追加された[40]。後述するように、親善部における日中女性との親善融和は、中国女性との交歓、留学生を囲む会の開催、中国女性向けのプロパガンダである。

3.1 現地の中国人女性との交歓 —— 中国へ渡った女性たちの記録

日中全面戦争が勃発してまもなく、多くの女性文化人が中国へ渡っていった。『輝ク』で発信していた女性たちは概ね、従軍する女性、旅行する女性、現地に駐在する女性、公務員として中国で仕事をしている女性というように四種類に分けられる。しかし、私的に中国女性と交流していた人は少なく、政府や軍部の指示で中国人女性と交流していたのが主なパターンである。

たとえば、黒田米子は渡支慰問班の一員として兵士を慰問するかたわら、漢口、南京、上海など、占領区現地の日華婦人交歓会で、職業婦人を中心とした上流中国人女性と交流した[41]。漢口で、彼女は中国人女性たちの真面目さを意識し、彼女たちの良書に恵まれたいという希望に協力する約束をしており、日本人女性に真似のできない上流中国人女性の進取性と社交性を感じている。

> 内容は兎も角、教育にも社会の待遇にも、男女同権を実行している支那婦人には、我が国の婦人に真似の出来ぬ進取性社交性があり、勝ち気がある。それを認め？(ママ)今後の親善も建設も行われねばならぬと思う。国民は国民と結ぶべし、一人が一人のよき友をもつこと、結局はそれが解決の道ではあるまいか。[42]

ここから、黒田米子が認識する東亜建設における文化日本の婦人の指導者としての立場がわかる。彼女の語りにおいて、男女同権の背景に育てられてきた上流中国人女性の進取性と社交性を認めることは、今後の親善と建設に必要な方策であると認識されているのである。「一人が一人のよき友をもつこと、結局はそれが解決の道ではあるまいか」というように、日中女性の個人間の友好つまり親善が悪化した日中関係を解決する方法だと考えているのだろう。また、彼女は上海で日本婦人宣撫班の山岸多嘉子が中国人女性に敬愛される様子を目の当たりに見て、「どんなに嬉しかったでしょう」[43]とその心情を吐露している。それは、戦時下に中国大陸へと渡った数多くの日本のインテリ婦人たちの、さまざまなお茶会で中国の有名人や上流婦人と付き合う姿の例として捉えられる。

しかし、彼女たちのこのような社交的なやり方について、ジャーナリストである戸叶里

(40) 「輝ク部隊 会員募集」、『輝ク』、1939.6、p.296。

(41) 例えば、黒田が漢口で面会した中国人女性は女子青年会の会長である石女史をはじめとした、教育事業に関わる十六人の女性教師たちであった（長谷川時雨、長谷川春子、大田洋子、田村房、黒田米子、山岸多嘉子「座談会：新生支那を語る　輝く部隊報告」、『新女苑』4-9、1940.9、p.229）。

(42) 黒田米子「中支慰問行」、『輝ク』、1940.7、p.347。

(43) 耀ク部隊「渡支慰問報告 —— その二」、『輝ク』、1940.7、p.346。

子は厳しく批判している。戸叶は、『輝ク』で日中の親善における女性知識人のやるべきことは中国人に対して「軽跳なお世辞を云う媚態的な親善風景になく、自分自身をしっかりした見識ある婦人として磨きあげ」、中国の知識階級の人達から「尊敬されるような女性となるように努力」すべきだと指摘している[44]。

3.2 来日した中国人女性との付き合い —— 内地の女性たちと留学生を囲む会

また、中国へ行かなかった女性たちは国内における報道や映画などを通して中国や中国の女性についての状況を得て彼女らを評価している。例えば、若林つやは映画『大地』を見て、日本人と比した中国人の肉体的な優越性を認め、「肉体的に西欧に匹敵する」のは中国人ばかりであり、映画で表象される忍耐強く折れない中国人女性の品格は期待される理想的な東洋の女性であると評価している[45]。映画『大地』はパール ·バック原作の同名小説に基づき1937年に制作されたアメリカの映画である。若林が中国人の肉体における優越性を認めるのは、こうした西洋人の視点からの影響であり、また実際に来日した中国人女子学生と接した時の体験によるものである[46]。一方で、彼女は来日した中国人女学生に対して明らかに軽蔑的な態度を示している。崇貞学寮に住んでいる中国人女学生たちの日本式の教育に対する抵抗や社会秩序を守らないことなどについて、彼女は次のように評価しているのである。

> 私はこのことをきいて、最早どうにもならない血液の古さということを思った。/日本の少女たちは社会の秩序ということを考えるであろう。規則についての批判はするかもしれないが —— 永い間の圧政に対する忍従と歴史に対する果てのない諦観、これ等が人を極度の不健康な個人主義としたのではあるまいか。/私は崇貞学寮の女学生たちの他に二三中国の若い女性たちを知っているが、その人たちに会っていていつも感じることは血液の古さということである。(中略)異国の女性ということを全く忘れてしまうほど立居、振る舞みな日本風なこの人たちと話していてふと血液の古さの片鱗をみるとき、清水氏の仕事の困難さを思い、寮母の先生の苦労のほどを思い、帰国後の条件などは、少しもないそうであるが、いずれ崇貞学園を助けることにもなろうし、新しい人間形態の建設のためのよき働き手となることを期待している。[47]

中国人女学生のよくない行儀を聞き、若林つやは「血液の古さ」という軽蔑的な態度を隠さずに示している。その「血液の古さ」というのは、社会的秩序と規則を守らない、「極度の

(44) 戸叶里子「日支親善」、『輝ク』、1940.10、pp.358-359。

(45) 若林つや「次代への警告——映画「大地」をみて——」、『輝ク』、1937.12、p.230。

(46) 中国人の体格について、若林は「カイザーリング伯がアジアで欧洲人と比肩し得る肉体を持っているのは支那人だけだと言っているが、崇貞学寮の少女たちも実に立派な肉体を持ち、高貴な美しい顔をしている」と述べている(「崇貞学寮のお友達へ」、『輝ク』、1938.6、p.246)。

(47) 同上

不健康な個人主義」のことであろう。つまり、彼女の認識において、中国人のいわゆる「不健康な個人主義」はその血液に流れている古い習慣であり、日本式の女性教育にそぐわない非文明的なものを意味しているのであろう。それゆえ、外形が日本風な中国人女学生たちと話していても、その中身の「血液の古さの片鱗」を感じており、日本人教育者の苦労と困難に思いをいたしたのである。ただし、ここで注意しておきたいのは、若林は「血液の古」い彼女たちが「新しい人間形態の建設のため」の良い働き手となることを期待していることである。彼女の考えにある「新しい人間形態の建設」というのは、日本式の教育で中国の若い女性を「文明的」に改造することを意味しているのではないか。それを達成するために、まず来日した留学生たちを教育し、将来、次世代の育成を期待できる人材に育つことを期待しているのだろう。

若林がそのような期待をするのは、彼女の認識において、日本と中国を包括する東洋は西欧に対抗する存在であるためであろう。前述したように、彼女は中国人が肉体的に欧米と匹敵することを認めており、中国人女性留学生についても、「立派な肉体を持ち、高貴な美しい顔をしている」と評価している[48]。つまり、彼女の中には、中国人女性は良質な肉体を持っているが、中身は古く、非文明的な血液が流れているという肯定的な評価と否定的な評価が同時に存在しているのである。東洋というカテゴリーに包括される日本と中国の人種について、西洋人に肉体的に匹敵するのは中国人であり、精神(文明)的に匹敵するのは日本人であるというように彼女は考えていたのだろう。中国人の「血液の古さ」に閉口しながらも、日本式の教育を通して中国からの女学生を「文明的」に改造し将来の「新しい人間形態の建設」を期待することで、東洋の女性として欧米に対抗できるようになると考えているわけである。その認識は、前述した文化指導的な日本婦人の立場と変わらないものであり、新東亜建設という侵略の論理が通底している。

輝ク部隊の成立後、若林つやは親善部の仕事に携わり、来日した外国人女性との親善に力を入れている。その初期には各国の女子留学生を招待した報告があったが[49]、その後は「満洲国」と中国からの留学生を輝ク部隊に入隊させ、「日、満、支」を中心とした女性懇談会を行っていたという[50]。『輝ク』には、「満洲国」や中国の女学生からの寄稿が載せられており、戦時下の良妻賢母と女性の国に対する責任を論じた記事[51]や、輝ク部隊に平和を感じ、中日の女性の間の親善と友誼に賛嘆して祖国の建設に努力しようという意志を示す中国人女子留学生の発言も散見する[52]。それは、日本式の教育を受けた彼女たちが、親善の意志を持つ女性文化人たちの影響を受けている証だろう。また、こうした女子留学生たちは、後ほど輝ク部隊の女性インテリたちが中国女性へ発信する際の仲介者(翻訳者)となった。このよ

(48) 同注(46)。

(49) 1940年2月の国際親善部の報告によると、カナダ、アメリカ、イタリア、タイ、中華民国、「満洲国」などの国からの女学生を招待し、懇談した(若林つや「留学女学生交驩会——国際親善部報告——」、『輝ク』、1940.2、p.328)。

(50) 若林つや「国際親善部報告」、『輝ク』、1940.4、p.336。

(51) 律影潭「輝く部隊と東亜の女性」、『輝ク』、1940.4、p.336。

(52) 徐竹芳「輝く部隊に参加して」、『輝ク』、1940.4、p.336。

うに、留学生を囲む会は親日の若い中国女性を集め、文化指導的な日本婦人を補佐する人材を育てる場として機能していたことは明らかである。

上記のような若林の姿勢と違い、金原寛子は中国人女性と謙虚に付き合っていた。彼女は中国からの女子留学生との親睦会の感想を次のように述べている。

> 皆若い。そして質素で張りきった姿が気持ちよかった。然しアメリカの学生とは違って無口でとても遠慮深い。(中略)こんな所に支那の人との親善はアメリカ人との様にぱっと直ぐ出来ない代わり、真心に触れさえすれば必ず出来るという確信が得られた。/同じ血に繋がれていると思うと、どうしたってこの学生達を捨てゝ置く事は出来ない。親善は卑屈であっても傲慢であっても出来るものではない。/痛感した事は我々も支那語を学ばなければならないということ。どんなに上手に彼等が日本語を話せたとしても、それは日本人の真心としてすべきではないでしょうか。(53)

金原寛子は中国人との親善について、アメリカ人とのように「ぱっと直ぐ出来ない」ことを意識し、真心に触れる必要があると述べており、中国人女性に学び、中国人と付き合う際には、卑屈でもなく、傲慢でもなく平等に付き合おうとする。その理由は「同じ血に繋がれている」ことに帰着しており、「血液の古さ」を強調する若林の上からの眼差しとは対照的である。特に、日本人の真心として中国語を学ばなければならないという彼女の考えは、戦時下の日本占領区や「満洲国」などにおいて国策に乗り日本語教育事業に携わる女性文化人たちの姿と逆様な形で示されている。金原の発言は、日本の中国に対する侵略という時局を超えることはできないにせよ、彼女なりに理解した親善の意味合いを示している。それは国策に乗ったものとは言い難いだろう。中国を踏みつけにせず、中国語を学ぶことを意識し、中国からの女子留学生と真心を込め平等に付き合おうという彼女の姿勢は、戦時下における女性インテリの発言の中ではごく稀な例である。

3.3 中国女性向けのプロパガンダ――捻じ曲がった善意と戦時下の母性主義の絡み合い

最後に、主宰者である長谷川時雨をはじめとする女性インテリたちの中国人女性向けのプロパガンダを分析する。1939年6月の「無形の『愛の殿堂』」という長谷川時雨の文章は中国国内で放送された。すこし長くなるが、引用する。

> どうかこの後は、兄弟の国として、緊密に手をつないで、東洋の平和と繁栄を祈り、どこまでも仲よく暮したいものと思います。/人類のせめぎあう痛みは、母体である母の――子を生むところの女性でなければ、ほとんどの痛みは感じません。それを思うとき、永遠の平和を祈る女性たちは、手をつないで平和工作に力を尽くしあわねばならぬと思います。/人類が生きる目的は、良く生きること、楽しい生活をすることですか

(53) 金原寛子「親善部主催　中国留学女学生との親睦」、『輝ク』、1940.10、p.359。

ら、母である女性はその目的を目ざして、どうか、お互いが仲よく暮してゆけるようにしたいものです。それには、共に善く知ることが、最も今日の急務と思います。これはお互いに他人事とすましていられない、生きとし生けるものとしての母性の要求、女性の尽くさなければならない任務であります。/あたくしの若い友達はおなじ思いの熱意に燃えて、あなたがたと、すこしでも仲よくなろう、打解けて語りあおうと、北支へ、満洲へと行っています。彼女たちの便りは東洋人の血はおなじである、すこしも他人とは思われない。/(中略)興亜の大精神を発揮することこそ、今世紀に恵まれた、アジア民族大発展の培いを、日支両国婦人の提携で、なしとげるのではなかろうかと思います。さあ、手をつなぎましょう、仲よく。人類の母体である女性たちは、一刻もはやく仲よく手をつなぎましょう。(54)

この文章の中で、長谷川は日中女性間の母としての共通経験や東洋人としての血族関係を強調しつつ、相互理解の重要性を示し、日中女性の間の提携を通して両国の永遠の平和を祈っている。その語りにおいて、「平和工作」は女性のジェンダー役割として位置付けられ、また、「母性の要求、女性の尽くさなければならない任務」であると強調されている。さらに、そのような考えは来日した中国の女子留学生に対しても同じである。彼女は留学生をその姉妹や母の代わりに、慰めてあげたいという気持ちを示し、「輝華会」のような個人間の和睦は「両国の親善の礎石である」と信じているという(55)。つまり、長谷川の中国人女性向けた語りにおいては、東洋人という血族的な繋がりと母性を通しての女性の提携が見られ、それを通じた平和工作領域における女性の活躍が期待されているのである。

若桑みどりは戦争とジェンダーの関係を次のように論じている。戦争は男らしいもの、活動的、能動的なものであり、それに対して、平和は女性らしいもの、非活動的、受動的なものである。この枠組みの中で、男性は兵士として前線へ赴き、女性は母、劣等労働者、チアリーダーとして銃後の役割を果たしている(56)。母性と平和の関係性を強調する長谷川の語りは、女性のジェンダー役割に対する国家の期待を超えていない/超えられない。とはいえ、女性らしい、しかも「母性の要求」である平和という認識は、「北支へ、満洲へと行ってい」るインテリ女性たちが実践しているように、従来の国家の論理における非活動的な「平和」を日中女性の「提携」という語りを通して、受動的ではなく、女性が国際社会へ進出するような能動的なものに書き換える。日中全面戦争開戦の前後、林芙美子は日本の軍部の政策に先立ち、女性ジェンダー化された日中親善と平和を語り、インテリ女性の国際社会への進出を主張していた(57)。愛国心に支えられたナショナリズムが根底である林芙美子の語り

(54) 長谷川時雨「無形の「愛の殿堂」」、『輝ク』、1939.6、p.294。

(55) 長谷川時雨「輝華会」、『輝ク』、1940.10、pp.358-359。

(56) 若桑みどり『戦争がつくる女性像』(ちくま学芸文庫)、筑摩書房、2000(初版:1995)、pp.13-128。

(57) 詳細は拙稿「林芙美子的文化侵略思想批判 —— 以1936年的北平之旅為線索」(『日語学習与研究』、2022年第1期 総218号、2022.2、pp.110-118)を参照されたい。

とは異なり、長谷川時雨の語りの根底には、国境を超えて全女性をつなぐインターナショナル・フェミニズム思想があると思われるが、軍部の文化婦人への要求に応答する際に、インターナショナリズムでも、ナショナリズムでもない東亜建設という枠に陥り、戦争に加担していくのである。これは、長谷川だけでなく、「母であり、女性である心の労わりあい」をもって、中国の女性と深く結ばれたいとする黒田米子の発言(58)や、「ロマンチストであるべき若い」日中女性の提携を求める平塚らいてうの発信(59)、「東洋人同志のきずな」を重要視する徳沢献子の文章(60)においても見られる。彼女たちの立場は長谷川と全く同じというわけではないが、白人を相対化し、新東亜建設の枠の中で、日中女性の提携を唱えているという点では同様である。それは、全女性のためという『女人芸術』と『輝ク』創刊当初の方針からずいぶん離れたものになってしまっているのである。

このように、戦時下の東亜建設という論理に侵食されてしまうインテリ女性たちの語りでは、東洋という地理的な枠組みに基づく血族と女性というジェンダーの枠組みに基づく母性が日中女性の親善と提携の重要な繋がりとして位置づけられ、それを通じた日中両国の平和が期待されている。同じ血であることによる心を込めた親善と提携の必要性と母性に基づく平和の重要性が、『輝ク』を拠点とした女性インテリの望みとなり、戦時下における国境を越えた女性「連帯」の希望の新たな形となった。だが、このような「連帯」は、日本へ留学に来た女子留学生や、占領区における親日派の女性たちなど、一部のブルジョア階層の中国人女性にしか伝わっていなかったはずである。中国における全国的な抗日女性たちの姿や声は彼女たちに届いていなかっただろう。従来のインターナショナル・フェミニズムは東亜建設という名目でインターナショナリズムとナショナリズムの中間地帯に滑り落ち、戦争に加担する形で帝国のフェミニズムへ(61)と変質し、彼女たちの善意もねじ曲がってしまっているとも言えよう。

おわりに

以上、本稿は『輝ク』の前身である『女人芸術』と比較しながら、『輝ク』における日中女性の連帯とその変節の過程を明らかにした。まず、『輝ク』に見られる女性文化人たちの中国人女性に対する真摯な善意という意識には連続性が認められ、多様性と幅を持ちながら、1940年前後まで持続していたといえよう。

その特徴として、前期は『女人芸術』と同じように左翼的な性格が強く、インターナショナリズムの雰囲気が濃厚であることが挙げられる。後期になると、最初は現地に駐在する

(58) 黒田米子、余淑訳「中国女性に贈る詞」、『輝ク』、1941.5、p.387。

(59) 平塚らいてう、余淑訳「中国の若き女性へ」、『輝ク』、1941.2、pp.374-375。

(60) 徳沢献子、王汝欄訳「日本の一女性から中国の女性へ」、『輝ク』、1940.11、pp.362-363。

(61) 帝国のフェミニズム：近代国民国家の発展における植民地主義と帝国主義を内面化し、主観的に女性の権利、ジェンダー平等などを求めるために誠実に生きようとしたが、結果的に加害責任に加担してしまうフェミニズムの有様である。（大越愛子「天皇制イデオロギーと大東亜共栄圏 ――「帝国のフェミニズム」を問う」、岡野幸江ほか編『女たちの戦争責任』、東京堂出版、2004、pp.51-52。）

日本人女性や従軍女性などの寄稿文が増加するが、主観的には中国の女性に対する善意であってもその意識の延長に自分の任務を果たそうとする動向が見られるようになる。また、輝ク部隊の結成に伴い、日中女性の連帯は、日本のインテリ女性たちと中国の占領区におけるブルジョア階層の女性の間の限られた「連帯」となっていく。そこには、東亜建設の侵略論理に侵食されている言説が多かったことは否めない。特に中国人女性向けのプロパガンダでは、同じ血という繋がりと母性が平和と提携の機能を果たすことが期待され、対抗ではなく、融和と包摂の形で戦争に加担する結果となった。

ここで、『輝ク』創刊当初に目指された「全女性の連帯」というインターナショナル・フェミニズムの夢は、実現する条件が失われ夢のままになってしまっただけでなく、血族と母性の「連帯」に限定されることで侵略の論理との親和性を抱え込むことになり、帝国のフェミニズムへと変質してしまったのであると指摘したい。彼女たちは、意識的に、あるいは無意識のうちに、親善や提携などを唱えながら東亜建設という陥穽に陥ってしまった。そこには、戦争を利用する一部のフェミニストたちの思想動向と中国女性をリードしようとする姿勢が見られる。それは中国人女性に対する非対称的な関係であり、中国人女性の多くには理解されない、捻じれた形の戦争協力になってしまった。そこには、親善、提携と平和という手段の危うさが存在していた。その危うさは、平和な時代である現在においても警戒すべきものであろう。なお、戦時下という極端な環境においても、金原寛子のような、真心を込め中国人女性と平等に付き合おうとするインテリ女性がいたことは、たとえ彼女が無名な人物であったとしても、日中文化交流史においては忘れられるべきではないだろう。

楊 佳嘉（よう かか、YANG Jiajia）
中国厦門大学外文学院助理教授

付記

本稿は中国中央高校基本科研業務費（課題番号：20720231002）の助成による研究成果の一部であり（This article is supported by the China's Fundamental Research Funds for the Central Universities.）、中国女性史研究会2023年11月例会での口頭発表に基づくものである。当日の例会で貴重な意見を賜った方々に感謝申し上げる。本論文における『耀ク』の本文の引用は、『輝ク』（第一巻、復刻版、不二出版、1988）による。本文を引用する際に、旧体字、旧仮名を適宜現行のものに改め、傍点、ルビを省略した。なお、戦前の文献を引用する際の表記も同様の基準を用いた。引用内の「/」は改行を、「（中略）」は中略を意味している。下線は筆者によるものであり、テクスト分析の重要な点を強調するために施した。また、本論文における「満洲」、「満洲国」などは歴史用語として用いるものである。

参考文献

日本語

飯田祐子「「女人芸術」と外部」、『女性と闘争――雑誌「女人芸術」と一九三〇年前後の文化生産』(飯田祐子、中谷いずみ、笹尾佳代編)、青弓社、2019年。

岡田孝子「望月百合子略年譜・著作目録」、『限りない自由を生きて――望月百合子集』、ドメス出版、1988年。

岡野幸江、北田幸恵、長谷川啓、渡邊澄子編『女たちの戦争責任』、東京堂出版、2004年。

尾形明子『「輝ク」の時代――長谷川時雨とその周辺』、ドメス出版、1993年。

尾形明子「田村俊子と『輝ク』」、『俊子新論:今という時代の田村俊子』(渡邊澄子編集、[国文学解釈と鑑賞]別冊)、至文堂、2005年7月。

輝く会編『輝ク』(第1巻)復刻版、不二出版、1988年。

近代女性文化史研究会『戦争と女性雑誌―1931年～1945年―』、ドメス出版、2001年。

長谷川時雨、長谷川春子、大田洋子、田村房、黒田米子、山岸多嘉子「座談会:新生支那を語る　輝く部隊報告」、『新女苑』4巻9号、1940年9月。

趙暉「謝氷瑩と中国文学研究会――竹内好、武田泰淳との交誼を中心に」、『人文学報』第352号、東京都立大学人文学部、2004年3月。

長谷川時雨「女性知識人に求める活動――輝く部隊について――」、『新女苑』3巻3号、1939年3月。

内務省警保局『昭和六年中に於ける出版警察概観』、1931年。

楊佳嘉「『女人芸術』における中国表象――越境する女性たちの記録を手掛かりにして」、『跨境:日本語文学研究』第8号、2019年6月。

渡邊澄子「戦争下の円地文子――『輝ク』時代を中心に」、『芸術至上主義文芸』第35号、2009年11月。

中国語

李炜『她们的叙事――近现代日本女性作家的战争书写研究』、上海交通大学出版社、2023年。

杨佳嘉「林芙美子的文化侵略思想批判――以1936年的北平之旅为线索」(『日语学习与研究』、2022年第1期 总218号、2022年2月。

英語

Sarah Frederick, Beyond *Nyonin Geijutsu*, beyond Japan: writings by women travellers in *Kagayaku* (1933-1941), Japan Forum 25:3, 2013.7